

大宮家文書中の依水園関係史料

はじめに 奈文研では奈良市と連携研究の協定を結び、奈良市氷室神社宮司の大宮守人氏が所蔵する、大宮家文書の調査を実施してきた。今回、その中に依水園関係の史料を見出した。明治時代の依水園の性格を考える好史料なので、ここに紹介する。

体裁 外題・内題に「依水園」と題した、能の謡本である。縦24.9cm、横16.6cm。袋綴装の冊子本2冊を紙綴で仮綴じしている。2冊とも共紙表紙をつけ、各13紙（共紙表紙共）、合計26紙である。2冊の本文は同文だが、朱書訂正は前冊に多く後冊には少ない。そこで前冊のみを右頁に翻刻した。ただしゴマ点は翻刻を省略した。朱書訂正の文字は、該当部分に傍線を付し、脚註に「」でくくって朱書を記した。ただし短文の朱書は「」で本文中に示した場合がある。朱書ミセケチは本文左側に「ミ」を付した。なお、本文の墨書には濁点は存在せず、朱書で追記したものである。翻刻では、仮名の濁点は表現したが漢字の濁点は省略した。また欄外の墨書注記等は脚註に記した。

奥書は前冊・後冊のそれぞれに存在する。前冊の奥書は右頁に翻刻した。後冊の奥書は下記に掲げる。

明治三十七年五月 奈良氷室神社宮司 大宮守慶述
同年七月 更正ス 平松甚平時範書
并節句拍子ヲ付ス

これらの奥書より、この謡本は明治37年（1904）に大宮守慶が創作し平松甚平が節句拍子を付け、大宮守長が朱書で校正したものであることが判明する。

内容 都で主君に使える臣下が、名所古蹟の風景を主君に伝えるために南都を訪れ、吉城川に至った。そこで会った老人に尋ねたところ、依水園に案内された。そこには調布を晒している者がおり、彼から、若草山・御蓋山・東大寺の眺めや、吉城川の流に晒す奈良晒、手向山の紅葉、雲井坂、南円堂の鐘などの名所を教示される。そして最前の老人は、氷室明神が現れた姿だった。

この話は、吉城寺（奈良阪町の善城寺カ）が「一新のころ」に廃寺になった・「大臣のはるばる東より御下向」とある点より、明治時代の情景を語っているのだろう。

背景 『奈良坊目拙解』巻14によれば、吉城川における奈良晒は延宝年間（1673-81）に木戸氏が始め、晒屋

「三心モ失（ウ）ツケ」（62）「カネテ」（63）「子細」（64）「先ツカ」（65）挿入「其名ニ背（ム）カヌ」（66）「頂（イタ）ギ」（67）「サテハ歎火耳無天ノ香久山」（68）「カケテ木津川ノ流マデ」（69）「ニテ神佐備立ル鋒杉二月懸カ」ル夜ハ唐モロコシ明州（メウジウ）ノ秋ヲ思ヒヤラレ」（70）「魏（キ）々タル」（71）「フ」（72）「散シク花の下蔭（シタワラビ）。折モタガヘズ。吾妹（ウキモ）子」（73）「晒ス調布ハ」（74）「其名ノミカハ」（75）「モ」（76）「カザス」（77）「ハ」（78）「ニコガル」（79）「モトバロ」（80）「ニ邂逅（メクリアヒ）」（81）「ハシ。共々」（82）「景色ヲ」（83）「間ニ急カノ」（84）「え」（85）「カ」（86）「の昔ヨリ此ノ処ニマシ」テ」（87）「傍書「アツマ」（88）「現形（ゲギヤウ）シタマヒケルニヤ」（89）「ナホモ」（90）「感セ」（91）「コソト」（92）「アラアリカタヤ」（93）「のつとハ」（94）「弥ましにタ、エツクシテ。カタルヘシ」（95）「頭注墨書後シテ／着付厚板／面大飛手／赤頭 法被／半切 扇／奈良晒／台ニ乗セツツ出ルカ／或ハ肩ニ掛出ルカ」（96）「つとニカツゲン」（97）「ぞ名ニ負フ調布」（98）「き」（99）「水ヲ幸（イハ）ヒノ神ナレバ晒ス調布ノ末カケテ幾代ツキセズ守ルベシ」（100）「語（ゴト）」（101）「ノ内外（ウチト）ノ」（102）「ニマツル神ミソヲ」（103）「ツカヘマツルノオホセゴトアラ荒妙ノ調カナ君ノミヲト。機人（ハタビト）ノ 齊ヒテ織レレ。夏引ノ手引ノ糸ハ末マデモ乱レヌ御代ノタメシナリ」（104）「ハ」（105）「ニチキリツ」ナホ」（106）「コソ。君ノ恵ノ露ナレバ受てさかえよ。草モ木モ」華（ハナ）咲く春ト。打ケムリ霞ト共ニ失ニケリ」

の門内の東南の吉城川沿いに、延宝天和年間（1673-84）に清須美氏が三秀亭という山荘を建てたが、その庭前は「佳美絶景」だったという。この三秀亭は現在の依水園の前園となっている（『名勝依水園修復整備事業報告書』名勝依水園・寧楽美術館、2017）。

その東方には東大寺の西塔門跡があった（『東大寺寺中寺外惣絵図』『奈良六大寺大観』第9巻東大寺1、岩波書店、1970）。江戸時代には門跡に大きな伽藍石が残っており、その付近は享保3年（1718）以降は晒屋が土地を借りている（新修東大寺文書聖教第5函1括37号・52号。また17函2括46号・65号など。『東大寺所蔵聖教文書の調査研究』2005参照）。門跡は現在の依水園清秀庵北側の、依水園の土地が北に張り出した場所である。以外も含め、江戸時代末には晒屋による東大寺からの借地は4700坪余にも上っていた（同第17函2括78号・99号）。明治17年の『大和名勝豪商案内記』（奈良県立図書館情報館が複製本を所蔵）にも、水門村で吉城川沿いに奈良晒業を営む絵が載っている。

その土地の主要部分は明治33年に関藤次郎の手に渡り、依水園と名付けて前園の東側に後園を造営していく。しかし明治37年生まれの藤井辰三の回想でも、留守番が「晒工場を営み、子供の頃遊びに行くと、カルキの臭がブンとして、若い職人さんが、エイホエイホと布地を搗いていた」という（藤井辰三『ふるさとの思い出 写真集明治大正昭和 奈良』国書刊行会、1979）。依水園となった後も、奈良晒生産は続いていた。

小結 依水園は水に恵まれ景色も良い名勝地である。明治時代にはそれに加えて、東大寺の近傍で奈良晒を晒している様子や傍らの氷室神社も、その構成要素だったことがうかがえる。近世から近代にかけての、奈良の歴史・産業を体現した景観が偲ばれる。（吉川 聡）

